

[研究覚書]

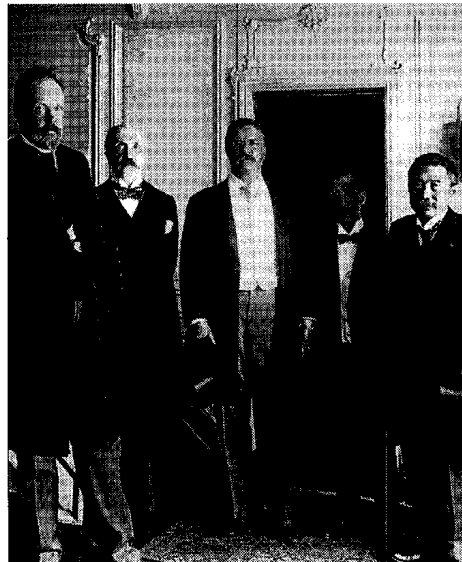
ポーツマス講和条約：忘れ去られた陰の ミディエーター達 [シリーズ (2)]

——高平小五郎 Vs.ルーズベルト——

Unknown & forgotten mediators for the
Portsmouth peace conference(part 2)

Kogoro Takahira Vs.Theodore Roosevelt

御手洗 昭治 (Shoji Mitarai)



President Theodore Roosevelt, center with S. Witte and R.R. Rosen at left, Baron Jutaro Komura and Kogoro Takahira at right(中央がルーズベルト大統領。左側よりセルゲイ・ウィッテとR.R.ローゼン。大統領の右側が小村寿太郎と高平小五郎。[ポーツマス海軍工廠提供])

Abstract

Since the 1980s, a large amount of literature on negotiations using gaming and experimental modeling techniques has accumulated. However, so far it has produced little of worth for the historian and researcher, who must delve into

actual political and diplomatic situations involving the complex interplay of numerous factors with mediation studies. Very few researchers have made an in-depth study of mediators besides President Theodore Roosevelt who were involved with the Portsmouth peace treaty. For example, Mr. Kentaro Kaneko is a fairly well-known attaché who served as a mediator behind the scenes between President Roosevelt and Jutaro Komura. Mr. Kogoro Takahira's mediation efforts, however, went unnoticed, along with those of other unknown mediators. This article deals with Kogoro Takahira's mediation efforts behind the scenes of the peace conference in Portsmouth, New Hampshire in 1905.

「はじめに」

セオドー・ルーズベルト大統領は、アメリカの対日関係を構築する上で重要な役割を果たした。同大統領は、当時（二十世紀初頭）の一般のアメリカ人よりも日本の力の拡大ぶりと、それがアジア地域に対して持つ意義も見通していた人物でもあった。

W. L. ニューマンは、「セオドー・ルーズベルトほど明確なアジアにおける権力政治構造を把握していたアメリカ人は少なかったが、同大統領が日本の友好に対して抱いていた関心は、当時のアメリカ人にとっては別に驚くことでもなかったと」述べている。又、「かつての教え子に対する好意的な見方がいかに強いものであるのかという事は、日露戦争時に明らかとなった」と指摘する [7]。

これまで、ポーツマス講和条約において中心的なミディエーションの役割を果たした人物といえば、セオドー・ルーズベルト大統領というのが定説になっている。

小村寿太郎がセオドー・ルーズベルトに対して信頼を持った主な理由は、ルーズベルトがウエアヘルムに比べて頼りがいがあると信じたことにある。

小村流に言えば、第一にジョージ・ワシントンがアメリカという共和国をつくり、エイブラハム・リンカーンがその団結を固めたと見るならば、セオドー・ルーズベルトはアメリカを世界的大国の地位に引き上げ

た大統領であること。第二に、ルーズベルトは、鋭い外交感覚と人間性についての深い洞察力に恵まれている人物ということにある。第三に、ルーズベルトのレールは、日本海戦以前に、誰の目にも既に既成事実として認められるようになっていた。

しかし、セオドー・ルーズベルトのMediation(調停・仲介)活動を水面下で支えた日本側の陰(影)のミディエーターが存在していたことも事実である。例えば、それについて、我々の脳裏に最初に思い浮かべる日本側の中心のミディエーター(小村寿太郎とルーズベルトの間で橋渡し役として活動していた人物)といえ、まず金子堅太郎であろう。金子はルーズベルト大統領とはハーバード大学の同窓であったがゆえに、大統領にアタッシュ的役割も含めた調停活動を展開した事は紛れもない事実である。

ちなみに、金子堅太郎の使命は重要であり、かつ複雑でもあった。一九〇四年二月四日の御前会議において、ロシアとの交渉を断念し、開戦に決定が下され、金子堅太郎の渡米が提案された。

当時、貴族院議員であった金子堅太郎は、一九〇四年二月二十四日、極秘で、日銀副総裁であった高橋是清とともにアメリカに向かって出発する。この出発は、内密であったためジャーナリズム、新聞報道もされなかった。

金子がアメリカに派遣された理由は二つある。まず、(1) 日露両国に利害を持っていないアメリカのMediationに期待がかかっていたため、アメリカ国内にも知人の多い金子をアメリカに派遣させ、個人的にも面識のあるルーズベルト大統領に和平の斡旋をさせるよう仕向けるためであった。(2) 加えて、金子を通してアメリカの世論工作を行うためであった。アメリカの世論に向けて、日本がロシアに対して開戦に踏み切った理由は、アジア地域の平和維持と安全保障に対し脅威を与えるロシアに対しする正当な戦いであることをアメリカの世論に向けて徹底させ、世論を親日的なものにさせるキャンペーンを展開することにあつたからである。

しかし、金子以外の人物で、ルーズベルト大統領と日本政府、また小村寿太郎の意向や意思決定事項を伝えミディエーターとして、調停・仲

介活動を行った人物が多く存在することも忘れてはならない。その一人が高平小五郎公使である。

特に、三月三十日と五月三十一日が講和会議開催に向けたターニングポイントであったわけであるが、それに関して水面下で調停活動を行ったのは金子賢太郎ではなく高平小五郎であった。また、日本側の樺太攻略作戦についての決定に関しても小村は、金子堅太郎ではなく、高平公使を自分とルーズベルトとのミディエーション役に抜擢するのであった。以下の記録がそれらを証明している。

[一九〇五年 三月三十日]

高平によれば、ルーズベルトの小村寿太郎に対しての発言は「余（ルーズベルト）思うに、ロシアおよびフランスは、列国会議を招集し、もって平和問題をその討議に付せんことを希望するが如し。しかれども、余の固く信ずるところをもってすれば、かかる問題は、両交戦国の直接談判によりて解決せらるることを要す」であった [4,p.12]。これに対し、小村も「列国会議の問題に関しては、日本政府は大統領と全然意見の符合するを知り、これを悦ぶものなり。おおよそ講和条件が両交戦国間の直接談判によりて決定せらるることを要するは、ロシアの次かつ明確に言明せるところにして、日本政府は従来また同一の意見を抱き、今日に至りて依然変わらず」とルーズベルトに伝えた。

[一九〇五年 五月三十一日]

また、五月三十一日には、高平を通してルーズベルトに対し、「もしも、講和談判開始の場合に至らば、これまったく両交戦国間直接に商議せらるべきものたるを依然確信す。しかれどもこの場合においても、両交戦国をして互いに接近し講和談判に入らしむがためには、中立の友誼好的斡旋を要すべし。

しかして帝国政府は、見識思慮ともに帝国政府の全然信頼する中立国において、右斡旋の任に当たらんことを欲するものなり。〈中略〉大統領は直接かつ全然その一己 [自分一人] の発想により、両交戦をして、直接談判に入らしめがため、両国を誘い当たるの意向を有

ポーツマス講和条約:忘れ去られた陰のミディエーター達[シリーズ(2)]

せらるるにおいては、帝国政府はその手続きいかん、ならびに本件に関していかなる他の一国または数国（もしこれありそすれば）と協議する必要ありやの点に至りでは、これを大統領に一任せんとす」と伝えた [4,p.12]。

[一九〇五年、六月九日]

日本海海戦の大勝後、列国側に講和を望む声が一斉に起こった。「六月九日、ルーズベルト大統領の斡旋によって日露両国が講和勧告に応じてた旨の発表が行われる<中略>。この決定にあたって、小村外相は、その軍事行動が講和会議の開催に支障となることを恐れ、ルーズベルト大統領の意向を高平公使を通して打診させた [13,p.37]。

以上が小村寿太郎が、金子ではなく高平公使を通してルーズベルト大統領に日露講和に対する主体的役割を求めた記録である。

以下では、これまで交渉学の研究者達が考察を試みてこなかったセオドー・ルーズベルト以外の人物でポーツマス講和締結のために水面下で貢献したミディエーター達に関して若干の考察を加えてみたい。なお、今回の研究覚書では、アメリカ側、及びロシア側の影のミディエーター達については考察を加えないこととする。それらについては、また論陣を張り発表を試みたい。今回は、高平小五郎公使が水面下で展開し、どちらかといえば、アタッシュ型・ファシリテイティブ・ミディエーション活動 (an attaché and a facilitative type of mediation move and activities) に焦点をあて、また、同氏の足跡について、ルーズベルト大統領がポーツマス講和へ関与した要因にも触れながら、研究覚書記録風に記載してみたい。

セオドー・ルーズベルトが捉えた講和と外交観

一九〇四年に始った日露戦争から一九〇五年に米国ニューハンプシャーで繰り広げられた「ポーツマス講和条約締結」にいたるまで、ルーズベルトが勧告した意見の大部分は日本に対して好意的なものであったという見方が強い。

ルーズベルトは、日米の国益が必ずしも相容れないものだと感じておらず、妥協をする構えでいた。一九〇五年の夏にウイリアム・ハワード・タフツ陸軍長官と桂太郎首相との意見交換書の中で、ルーズベルトは日本の朝鮮支配をイギリスと同様に認めると共に、日本のフィリピンへの野心はないものとの認識も得た。

セオドー・ルーズベルトの斡旋とミディエーション介入が日露両国に受け入れられ、その結果、日本全権の小村寿太郎とロシア全権のセルゲイ・ウィッテ一行がポーツマス入りすることになる。ロシアは日本の朝鮮における日本の立場を承認し、サハリン（樺太）の南半分を日本に割譲し、さらに南満州の権益と阻害地を譲渡した。日本の賠償金請求は取り下げられるわけであるが、ルーズベルト大統領は、ポーツマス講和に対してのミディエーターとしての働きかけにより、ノーベル平和賞を受賞するとともに、この講和条約作成に寄与した小村寿太郎一行に対する日本の群衆の痛烈な怒りの言葉を日本政府とともに耐えることになる。ルーズベルトは大統領としての在任期間の最後の三年は、それまで以上に対日関係に関わりを持つ事となる。

日露講和後は、アメリカにとって極東問題の焦点がロシアから日本に移行する。これは、当時のパワーポリティックス上では自然な成り行きであった。ただし、この間日本にとって特殊問題が存在した。日系の移民問題である。一九〇八年の紳士協定では日本人移民は教育のある者だけに限り移民が認められ、労働移民は自発的に禁止されることになる。争点となったのは、既に移住していた日本人農民が勤勉かつ有能でもあり、西海岸加州の土地の所有者となるにつれ、対日本人差別法が加州で制定されることとなる。

首都ワシントンの中央政府は日本に対しては同情的であった。ルーズベルト大統領自身、日本が欧米の列強と同等の文明国でありアメリカの友好国であることから、一地方の州が国交を損うことは兵力を用いても阻止するとも公言した。しかし、最終的には、大統領と州議会との憲法上の関係で如何ともできなかったのである。アメリカ合衆国にとって日系の移民問題は国内の副産物となる。

ルーズベルト大統領の講和条約以前の調停工作の動向

一九〇四年「欧米列強国間での講和（和平交渉）勧告のきざしは、既に前年の明治三十七年十二月中旬にあらわれていた。」その頃、乃木まれすけ希典大将の率いる第三軍の旅順攻略が成功するか否かは、「日露戦争の勝敗を左右するもので、陸戦のみならず海上兵力の存亡にも重大な関係があった [13,p.11]。一九〇五年六月下旬頃、日本国内の新聞紙上に「ヨーロッパ方面の情報として、アメリカのセオドア・ルーズベルトの斡旋による日露の講和の気運がきざしているという記事がみられるようになっていた。しかし、ロシアは日本にうばわれた制海権を取りもどすため、本国からの第二、第三太平洋艦隊を出発させ、艦隊はアフリカ南端をまわる長い航海をへて日本近海に近づいてきた。世界各国は、やがて開始される大海戦の予想に興奮し、自然に講和論は立ち消えになっていた [13, p.8]」。

旅順陥落のニュースが世界各国に伝えられるや否や、講和論が公然と唱えられるようになった。旅順が難攻不落の大要塞であっただけに、その陥落が欧米列強各国に与えた衝撃は大きかった。

アメリカのセオドー・ルーズベルト大統領が旅順陥落後、最初に「日露講和」ミディエーションの意向を伝えたのは、ロシア皇帝ニコライ二世であった。しかも、それは直接にはではなく、フランス大統領エミール・ルーベを通してのものであった。ルーズベルトがルーベを仲介者としてロシア皇帝に勧告した内容は「現在、和議をおこなえば、ロシアの損失条件は軽くてすむだろう」であった。しかし、これに対しニコライ皇帝の答えは、「ニエツト (NO!)」であり、「本国を発したロシア艦隊と奉天附近に集結する数十万の陸上兵力の勝利を確信し、あくまで戦争を継続する」と厳しい態度で拒否した [13,p.20]。この結果、「和平交渉」(cease fire through negotiation) のへ列強国の動きは絶え、奉天附近でおこなわれる日露両軍の決戦とロシアのバルチック艦隊と日本艦隊の海戦結果を静観する態度を取るしか残された道はなかった。

当時の日本政府首脳側も、むろん戦争の将来に不安を抱いていた。他

方、ロシア国内の社会混乱が増していることに一つの望みを見出していたのである。

「ルーズベルトと高平小五郎公使」

セオドー・ルーズベルト大統領が日本側の意向に対しさぐりを入れたのは、高平小五郎公使を通してである。日時は一九〇五年三月十六日と記録されている。

それは、フランス政府が、駐米フランス大使のジュランに命令し、アメリカ大統領にしきりに働きかけ、日本政府に和平交渉の条件をただし、それをロシア側に伝え打診しえはどうかと薦めたからである。問題は、そのことを知ったドイツ政府は、今度はルーズベルト大統領に対して「ロシアはなお、一年間交戦する戦力は持つが、日本は長期戦に耐えられる力はない」と伝え、フランス政府の講和案に揺さぶりをかけようとしたからである。

ルーズベルト大統領は高平小五郎駐米公使に「日本に講和に応じる意志があるのか。もし意志があるのであれば、列国に公表し、その条件を示せば国際的に日本の立場は有利になるであろう。」と説いた。

そのような状況下の中で、ルーズベルト大統領からの講和勧告が伝えられたのであるが、桂内閣が慎重な評議を重ねた結果、小村寿太郎外相から高平駐米公使に対し、「我が国は、現在の情勢からみて講和を口にする意志はない」という回答を送った。理由は、ロシアに対して強硬な姿勢を示すことが、かえってロシア側に講和の気運をうながす効果があると判断されたからであった。ちなみに、ロシア国内でも、日本との戦争をロシアの不法行為だと非難している者も多かった。

日本の新聞は、一部を除いては、講和の気運には強い反発を示していた。その後、金子堅太郎が水面下で高平公使に代わり、アタッシュエ型ファシリテイティブ・ミデイエーター (an attaché and facilitative type of mediator) としてポーツマス海軍工廠の外でルーズベルトに対してミデイエーション活動を展開することになるのである。これまでは、金子堅太郎の工作・調停活動に関しての文献、資料は数多く存在するが、高平小

五郎公使がポーツマス講和会議の舞台裏で展開した工作活動やミディエーション活動についての報告・記録は無に等しいといっても過言ではない。

ところで、ポーツマス講和会議で交渉が暗礁に乗り上げそうになった時、小村は、領土と賠償の要求が容れない場合には、交渉を打ち切り、戦争を継続することを主張する。この小村の強硬さに一番手を焼いたのがルーズベルト大統領である。そのため、ルーズベルトは直接日本の首脳に訴え、最終的には伊藤博文と西園寺公望の決断により、日露の間で講和条約が締結されることになる。この間、ルーズベルトは小村の側近の高平小五郎公使とも紛争を決着するための話し合いを幾度も持っていた。しかし、高平はあくまで小村の部下であり、あくまで陰(影)の功労者であった。このため、高平公使のアタッシュ型・ファシリテイティブ・ミディエーション活動、諜報活動に関しての細部にわたる資料や記録は電報以外は残っていない。例えば、歴史家のP. ランデルの文献資料の中では、高平のポーツマス講和会議期間の動向について、「日露講和会議の席上では、ロシアのウイッテの側近でミディエーターであったローゼンは、ウイッテの通訳も兼ねていたせいも、彼の話し言葉は聴こえてはくるものの、高平公使が発する言葉は聴かれはしなかった。たとえ聴こえたとしても、それは十行以内のものに過ぎなかった [10,p.47]。」と講和会議中において、いかに高平が口数の少ない (a man of taciturnity) 小村の片腕でかつ協力者であり、またミディエーターであったかをたった数行の記録文に留めているだけである。

Preface

Of all the American Presidents, Theodore Roosevelt was the first, and most influential President to take a major part in shaping the American relationship with Japan. Theodore Roosevelt also envisaged more clearly than most Americans the great growth of Japanese power, and its vital importance for the Far East (today's Asia Pacific region). In other words, few Americans in the early part of the 20th century were as clear in their grasp of the power politics of Asia as President

Theodore Roosevelt.

As Commander in Chief, Theodore Roosevelt admired and venerated Japan—particularly, Japan's ability to adopt and use effectively western-style military strategies. Roosevelt's concern for a strongly favorable image of Japan was demonstrated during the crucial period of the Russo—Japanese War.

From the beginning of this conflict to the signing of the peace treaty at Portsmouth, New Hampshire, in September of 1905, Theodore Roosevelt sought to exercise a moderating influence on the outcome, although he never attended Portsmouth during the peace conference.

Japan placed too much trust in President Roosevelt's personal ability as a mediator to bring the Russian side around to accepting the Japanese position before the Portsmouth conference.

He enjoyed the advantage of having stood aloof from European politics, but was so much concerned over Far Eastern developments[6].

He was astute enough to realize that in the flush of victory Japan, as he wrote Henry Cabot Lodge, "will have her head turned to some extent," but he indicated that the same thing would be true of the United States if it had accomplished such historic feats.

Roosevelt did not feel that the national interests of the two countries were necessarily incompatible, and he was ready to make compromises. In the summer of 1905 with Prime Minister Taro Katsura, Roosevelt accepted Japan's control of Korea and received a disavowal of Japanese aspirations to control the Philippines.

The U.S. offer of mediation was accepted by both Russia and Japan, and the Japanese side led by Jutarō Komura and the Russia side led by Witte came to Portsmouth, N.H. to negotiate and to come to terms.

Russia gave up on half of the southern island of Sakhalin, recognized Japan's position in Korea, and turned over its rights and concessions in Southern Manchuria. But when Japan's claims to indemnity were dropped, it created a commotion in Japan, where the peace was bitterly criticized. The consequent riots led to the resignation of the Prime Minister Katsura, which surprised the

Americans at large.

While Theodore Roosevelt received the Nobel Peace Prize for his mediation work at Portsmouth, he was not the only mediator who contributed to the peacemaking efforts. There were many forgotten mediators who served as special envoys. They were instrumental and indispensable in bringing about peace at Portsmouth. Especially deserving of praise were Kentaro Kaneko's services in Washington D.C. and in New York. There is a bulk of literature and printed material with regard to Kaneko's activities as a mediator, and as a special attaché or envoy. However, the peace-making efforts made by other mediators went unnoticed.

This article explores, in a cursory fashion, the other special envoys and mediators whose contributions were forgotten or sank into the secondary importance in the negotiation settlement in Portsmouth, New Hampshire in 1905. In this section, the present author treats Kogoro Takahira's personal records and contributions.

On Kogoro Takahira

He was born in Iwate Prefecture in 1854 at the time when Matthew Calbaith Perry concluded the U.S.-Japan amity treaty. Takahira attended Kaisei Gakko, a precursor of Tokyo University. He was first employed by Kohbusho—the early Ministry of Public Works during the Meiji era. In 1876, Takahira joined the Ministry of Foreign Affairs and served as minister to Italy and Austria before becoming vice-foreign minister in 1899.

As minister to the United States from 1900, he acted as an mediator during the Portsmouth peace treaty in 1905—concluding the Russo—Japanese War along with Mr. Kentaro Kaneko. In 1908, he as ambassador, he signed *the Tahahira-Root Agreement*, which sanctioned the status quo in the Pacific and provided equality of commercial opportunity to Japan and the United States in China[11,p.313].



Baron Komura, left and Kogoro Takahira, right in their carriages en route to Governor's reception in Portsmouth on August 8, 1905. (ニューパンプシャー知事からの招待を受け、レセプション会場に向かう途中の小村全権大使と高平小五郎公使[筆者資料])

Rosen Vs. Takahira

In this section, a special attention must be paid to the way in which or how other foreign observers and historians record mediation activities done by Mr. Kogoro Takahira. However, it also should be pointed out that very little record and printed materials on his activities have been written.

Randall, for instance, points out aptly that Witte and Komura were invariably the negotiators, but two ambassadors, Roman R. Rosen and Kogoro Takahira were sinking for the time being into persons of secondary importance.

Rosen and Takahira were genuine mediators who for the time sat still and listened. "Thus from the beginning of the conference to the end, Takahira did not speak ten sentences, and if Rosen's voice was more familiar it is only because he acted as interpreter. Komura and Witte were, therefore, the heroes of the drama [10,p. 47]."

Takahira<>Roosevelt<>Komura & Takahira<> Witte

Takahira's mediation activities communicating directly with Witte on August 27, 1905 paved a way for the Portsmouth peace conference. But Takahira's role as a mediator in the month of March, 1905 went unnoticed by many people — at the time when Russo-Japanese relations were at the crossroads and when the two nations tried to seek peace. If President Roosevelt can be referred to as a neutral mediator, Mr. Takahira can be called a facilitative mediator. The following furnishes us with some information on it.

[Western Powers and Asia Before March 16, 1905]

In and around March in 1905, the Japanese victory in Mukden on March 10 marked one more step toward peace. Public opinion throughout the world read that the Mukden battle the last hope for Russia crushed beyond the repair, and even pro-Russian papers reported an immediate termination of the war as the only way to save Russia's face. A desire for peace was on the rise even in Russia. On March 14, Finance Minister Witte, in a memorandum to the Tzar, pointed out the financial difficulty of continuing the war and pleaded the wisdom on the battlefield in Manchuria.

French Ambassador Doussan in Washington, D.C. tried to convince minister Kogoro Takahira as well as President Roosevelt telling them that Russia was prepared to continue the war for another year, but that Japan would be unable to endure for that period.

Thus, President Roosevelt sat out on the trial of mediation. He met with Kogoro Takahira several times and urged Japan to take advantage of the favorable position of the Japanese army in Manchuria to conclude peace, but tried confidentially to learn Japan's terms, particularly, her intention to exact any indemnity. The following record specifies Kogoro Takahira's activities.

[On March 16, 1905, Takahira communicating with President Roosevelt]

While on March 16, Takahira met with President Theodore Roosevelt. But prior to that date, on March 8, Terauchi approached Loyd Griscom, the American minister, and asked him to tell President Roosevelt that the time had come for the war to cease. But in the end, nothing came of the Terauchi initiative. Regardless of what meaning the military leaders drew from the outcome in Mukden, Jutaro Komura was sticking to the position that the Russian tsar must take the first step toward peace.

President Roosevelt had high expectations that France might take an initiative for peace. But France was not far off the mark. Because France had nothing to gain by the continuance of the war, and Russia's involvement in Asia let the European power balance badly awry.

While President Roosevelt was cautious and showed reserve at the time of Terauchi initiative, he was nonetheless very desirous of making peace negotiations get underway. On March 15, President told Jusserand that Japan had achieved so much success that it could take the first step without fearing any interpretation to its disadvantage. The day following his talks with Jusserand on March 16, President Roosevelt had a talk with Tahahira and indicated to him that Japan should let neutral nations know in every possible way of its desire for *peace* and *its terms*(bargaining tips)at the same time. The reasons for that initiative were :1), everyone was fully aware of the fact that Russia was defeated; 2), Japan should build a golden bridge for the Russians; and 3), and gave Russians an escape.

[On March 22, 1905, Takahira communicating with President Roosevelt]

On March 22, President once again spoke with Takahira telling him that both Jusserand and Sternburg felt Japan should initiate *peace talks*.

“Komura was in complete command of his delegation.” Takahira smokes in silence. Korostovetz noted, “only exchanging remarks with Komura at intervals[2,p,97].”

[On March 31, 1905, Takahira communiating with President Roosevelt]

In his talks with Takahira, President Roosevelt found that there had been no change in Komura's stance. Takahira asserted to President Roosevelt "Japan had the money and the men to continue the war for another year and he did not foresee any overtures for peace unless they came from the tsar himself." Roosevelt commented that "Japan should not lose sight of the fact that in a year Japan would find itself, even under the most favorable conditions, victorious perhaps but certainly weakened." Roosevelt also urged moderation in Japanese peace terms. He declared that "it would be best for Japan not demand an indemnity." At that point, Takahira read to him a telegraph from Komura stating that based on international precedents, Japan had every reason to demand reparations.

About the discussion continued about indemnity, Roosevelt said that he was not be sure about the issue. He personally would like to see Japan get an indemnity, but the European attitude should be considered. Furthermore, Russia did not have the money to pay an indemnity. The record of Roosevelt's talk with Takahira shows clearly that Komura had every intention to press the money claim regardless of the difficulties that such a demand would create. Roosevelt soon learned that Komura would also demand territory. After he left Washington, Takahira relayed a message to him from Komura stating that Japan would demand the cession of Sakhalin Island as well as payment of indemnity[2, p.28].

At the time Roosevelt was talking to Cassini and Takahira, the Russian tsar had already secretly taken a first hesitant step toward peace. After the failure of the French loan negotiations in mid-March, Nicholas had decided to accept a recommendation from Ambassador Aleksander Ivanovich Nelidov in Paris that he seek assistance from Delcasse.

[Roosevelt's secret meeting with Cassini & Takahira on April 3, 1905]

President Roosevelt met separately with Cassini and Takahira. He indicated to Cassini that a quick peace was in the interests of Russia and that any postponement

would make the peace terms more difficult. He assured Cassini that he gave this advice not in the interest of Japan, but in the interest of Russia and also in the interest of the United States. Because the United States would regret the exclusion of Russia from the Far East.

[On August 27, 1905, Takahira communicating with Witte]

On Sunday, August 27, 1905, renewed evidence was given that the Russians were not going to make any further concession. When Takahira went to see Witte to request that the scheduled Monday meeting be postponed to Tuesday, Witte reiterated his position. He said he did not see any way he could refuse the request, but under no circumstances would he back off from the decision that had been taken according to imperial instructions. Any proposal he would immediately reject without referring it to St. Petersburg. He declared that if the Japanese were expecting Russia to yield, they were wasting their time and holding the whole world in suspense. [2.,p.152].

When the Russians arrived at the navy yard on Tuesday morning (Aug. 29), the Japanese were already awaiting their arrival. Before the formal session began, Komura invited Witte and Rosen to meet privately with himself and Takahira. Exactly what was said in the secret consultation is not recorded. It went on for three-quarters of an hour. In the attache's room that adjoined the conference room, the members of the Russian delegation anxiously awaited the outcome of the informal session. "We felt nervous," Korostovetz recorded. Nobokov, who was the most passionate partisan of peace, expected the worst and was in low spirits. Finally, suspense ended when Witte emerged from the conference room and announced to his colleagues, "Well, friends, peace. They agreed to everything." Korostovetz ran up and embraced him, and everyone began to talk at once exchanging congratulations [4, 00.191-22; 13, pp.243-250 & 2.p.159].

As final remarks, the present author would like to note that at Portsmouth, New Hampshire on August 29, 1905, both Russian and Japanese terms were not basically far apart. But when it comes to the issue of a money indemnity--- which

was large enough to meet the war cost--- was added to, President Roosevelt balked as a main mediator and the tsar resolved on renewing the war. Japan, of course, could not afford to do so, nor would the New York banks allow further credits. Roosevelt expressed his personal views in such a way that 'It is Japan's interest now to close the war. She has won the control of Korea and Manchuria: she has doubled her own fleet in destroying that of Russia; she has Port Arthur, Dalny, the Manchurian railroad, she has Sakhalin'(E.E.Morison ed., "The Letters of Theodore Roosevelt(8 Vols. Cambridge, Mass.: 1951-4)" Vol 4, pp.1308-1310 & 1312-1313[4]).

Britain stood on the sidelines. While the peace conference was in session in August 1905, she renewed the Anglo—Japanese alliance with Japan. Its terms strengthened over those of the original agreement. Korea standing in relation to Japan in American eyes as Cuba stood to the United States. There was no hesitation over acknowledging a theory of balance of power. So the term called "alliance in practice" was used among the three power.

Theodore Roosevelt's objective of "balance of power" in the region of Northeast Asia was achieved. Many newspapers throughout the world lavished praise on Roosevelt. The New York Times, for example, emphasized his initiative, his tenacity, and his adroitness won the thanks of the cultivated world for the conclusion of world peace. He was regarded as a master of diplomacy such as does not otherwise exist.

[August 30, 1905 Roosevelt became a main actor & Reflections]

When Roosevelt's role changed from convener to active mediator, Britain resented Roosevelt's role as an active principal player. Roosevelt himself thought that he was negotiating for nothing more than a bilateral agreement between Japan and Russia, albeit one that met U.S. foreign policy and American interests. He used his position as a principal mediator to build his negotiating influence in the dispute of the Portsmouth peace conference, but there were other mediators besides Roosevelt on both sides of the Pacific Ocean. Their activities and contributions as

mediators were: either overshadowed by President Roosevelt, or went unnoticed, or were forgotten. Kogoro Takahira was one of these mediators. He was also an attaché and a facilitative type of mediator between President Theodore Roosevelt and Jutarō Komura.

References

1. Burns, R.D. & Bennett, E.M. (1974), *Diplomats in Crisis*, Santa Barbara, Calif.: ABC-CLIO, Inc.
2. Esthus, R.A. (1988), *Double Eagle and Rising Sun*, Duke, Durham & London.
3. Hando, Kazutoshi & Hosoda, Chihiro., Ed. (1983), "Komura Jutarō" in *Nihon Gaiko No Kishu*, Tokyo: TBS Britanica.
4. Kanayama, Nobuo (1984), *Komura Jutarō To Portsmouth*, Tokyo: PHP Pub. Morrison, E.E. *The Letters of Theodore Roosevelt*, 8 Vols. Cambridge, Mass.: 1951-1954, Vol. IV, pp. 1308-1310 & 1312-1313).
5. Mitarai, Shoji (2005), *Portsmouth Kohwa Joyaku No Saikentou (Re-examination of the Portsmouth Treaty: Multilateral Negotiation & Mediation Analysis & Unknown parts of Jutarō Komura)*, in Hikaku Bunka Soron in *Journal of Comparative Cultures*, No. 16, Sapporo University.
6. Mitarai, Shoji (2004), "Grantō Seikenka No Mediation" (Mediation Under the Grant Administration) in *Japan Negotiation Journal*, Tokyo: Japan Institute of Negotiation.
7. Newman, W.L. (1963), *America Encounters Japan*, Baltimore, MD.: The Johns Hopkins University Pr.
9. Nihon Gaiko Bunsho: *Nichiro Senso*, (5: pp. 223-235, "Telegraph from Takahira to Komura," March 16, March 29, 1905 & 5: pp. 226-227, "Telegraph from Takahira to Komura," March 31, 1905; Japan's Ministry of Foreign Affairs, *Komura Gaiko-shi*, Tokyo: Kuretani Shoten Pub. Vol. I, pp. 434-435).
9. Okazaki, Hisahito (2003), *Komura Jutarō To Sono Jidai*, Tokyo: PHP Pub.
10. Randall, P.E. (1985), *There are no Victors Here!*, Portsmouth Marine Society, P.E. Randall Pub.
11. Reishauer, Edwin O. (Editor), (1983), "Kogoro Takahira" in *Kodansha's Encyclopedia of Japan*.
12. *The New York Times* (Aug. 30, 1905).
13. Yoshimura, Akira. (2000), "Portsmouth No Hata" in Yoshimura Akira *Jisenshuu*, Tokyo: Sinchosha Pub.

ポーツマス講和条約:忘れ去られた陰のミディエーター達[シリーズ(2)]

This article grew out of the author's lecture notes entitled "International Negotiation and Mediation: 2004-2005". The author is also grateful to Sapporo University for providing him with research grant.

——今回の研究覚書は、2006年度札幌大学研究助成に基づいて行われた研究成果の一部である。——